

『なしこまどんと笑顔あふれる東葛』

自然ゆたかな街並みの広がる、千葉県松戸市。

この町には、東葛の地域を見守ってくれる狛犬さま『なしこまどん』が存在するのだと、昔から言い伝えられました。

なしこまどんを実際に見たことがあるという人は、そう多くはいません。

なしこまどんはいつでも、人の目に見えないようにみんなを見守り、そして、困っている人を見つけると、そっと背中を押してくれるのだそうです。

しかし、一部の人は言います。

「不運なことを乗り越えられた時、そっと辺りを注意して見てみるんだ。梨の帽子をかぶって、矢切ねぎのマフラーを首に巻いた、緑色の狛犬さまが見えるかもしれないぞ！」

その狛犬さまをじっと見つめてみると、狛犬さまはあわてて姿を消してしまうのだそうです。何人もの狛犬さまを見たと騒ぐ人々は、最後には口々にこう言います。

「なしこまどんが消えてしまう時は、必ず小さな鈴の音が鳴るんだ！」

「困ったなあ」

そう一人つぶやいたのは、松戸市に暮らす小学生の女の子、ゆかりちゃん。

ゆかりちゃんの目の前には、畑が広がっていました。ふかふかとした土からは、矢切ねぎの緑色の頭がとび出しています。ゆかりちゃんはじっとそれをにらんでから、ため息をつき

ました。

「何か困りごとでもあるどん？」

ふと、ゆかりちゃんのそばで、やさしい声が響きました。

「だれかいるの？」

ゆかりちゃんは顔を上げると、あたりを見まわします。しかし、あたりは見わたすかぎり畑だらけで、だれの姿も見えません。

「ここにいるどん！下を見るどん」

ゆかりちゃんが足元を見下ろすと、そこには緑色のぬいぐるみのようなものがあります。まるまるとした頭からは動物のような耳が生え、梨の形をした帽子をかぶっています。

「わあ！ぬいぐるみがしゃべった！」

「ぬいぐるみじゃないどん！わっちはなしこまどん！このあたりを守っている狛犬だどん」

「なしこまどん……？」

ゆかりちゃんはその名前を聞いたことがありません。

「なしこまどんって、あのなしこまどん？どうしてここに？」

「嘘じゃないどん！わっちはふだん、みんなに見えないようにしているだけで、すぐそばにいるどん。でも、ゆかりちゃんが困っているみたいだから、つい出てきちゃったどん！」

なしこまどんが胸を張ると、首に下がった母の形をした鈴が、チリン、と音をたてました。

「それで、ゆかりちゃんはどうして困った顔をしているどん？」

「それはね……」

ゆかりちゃんは畑を指さします。なしこまどんがよく見てみると、頭を出している矢切ねぎは、ひどく荒らされて、傷ついているようでした。

「わたしのお父さんが育てた矢切ねぎが、動物たちに荒らされちゃったんだ」

「これは……害獣のしわざだどん」

「がいじゅう？」

「畑にわるさをする動物のことだどん！モグラやスズメが食い荒らしてしまうと、その矢切ねぎは食べられなくなってしまうかもしれないどん……」

「そんな……」

ゆかりちゃんのひとみに涙が浮かびました。

「害獣たちがわるさをやめてくれなかったら、矢切ねぎが育てられなくなっちゃうのかな……そうしたら、わたしたち、暮らしていけなくなっちゃうかも……」

「その心配は無用だどん！」

なしこまどんは声をはり上げます。

「JAとうかつ中央にこのことを相談してみると、色んな支援が受けられるんだどん！」

「JAとうかつ中央……？支援……？」

「JAとうかつ中央は、いつでも新しい技術じゆつを農業に取り入れようと頑張ってくれているんだどん！相談してみたら、害獣を防ぐために、色んなことを手伝ってくれるどん！」

なしこまどんは、ふわりと宙ちゆうに浮かぶと、やわらかい手でゆかりちゃんの涙をぬぐいませした。

「だから、ゆかりちゃんが一人でなやむ必要はないんだぞん。困った時は助け合うことが大事だぞん。ゆたかで暮らしやすい東葛地域は、みんなの助け合いで作られているんだぞん！」

「わあっ！」

なしこまどんの言葉に、ゆかりちゃんはパツと笑顔になりました。

「助け合い……それなら、わたしもいつかだれかを助けてあげられるってこと？」

「もちろんだぞん！困った時はみんなで助け合いながら、安心して暮らせる東葛地域を作っていくんだぞん。そうやって農業をもっともっと広めていくことこそ、わっちが夢見る未来だぞん！」

そう話すなしこまどんのひとみは、きらきらと輝いているようでした。そんななしこまどんを見ていると、ゆかりちゃんの中に、燃えるような勇気がわいてきます。

「わたし、さっそくお父さんに話してみる！」Aとうかつ中央に相談してみようって！」

「頑張るぞん！畑と矢切ねぎを守るんだぞん！」

走り出したゆかりちゃんを、なしこまどんはあたたかく見送りました。

なしこまどんの言ったとおり、JAとうかつ中央の社員さんは、ゆかりちゃんとお父さんのうったえをととてもよく聞いてくれました。

社員さんの手助けもあり、一面荒らされていた畑は、今はすっかり元どおりになりました。矢切ねぎの頭も元気そうに、そよそよと風にゆられています。

「これも全部、なしこまどんが助けてくれたおかげだね！」

ゆかりちゃんは畑を見てそう言いましたが、なしこまどんから言葉は返ってきません。あの日、なしこまどんと別れてから、すっかり姿も見えなくなっていました。

「なしこまどん……？もう、いなくなっちゃったの？」

肩を落としたゆかりちゃんの耳元に、ふと、小さな鈴の音が聞こえたような気がしました。

チリン、チリン。何度か鳴ったそれは、少しずつ離れていきます。

ゆかりちゃんは音の方を振り向きました。その目には、たしかに青空の向こうに浮かんでいる、緑色の影が見えたのです。

「なしこまどん！本当にありがとう！わたし、次はなしこまどんみたいに、だれかを助ける側になるね！」

ゆかりちゃんの言葉を最後に、鈴の音は完全に消えてなくなりました。

しかし、なしこまどんは姿を消しただけで、宙に浮かびながら、ゆかりちゃんの晴れやかな笑顔を見ていました。

「また一つ、東葛地域の笑顔を守れたみたいだぞん」

なしこまどんは満足そうにひげをふくらませると、また別のところへと飛びたっていきました。

「さあ、明日もみんなの笑顔を守るぞん！」

なしこまどんのひとりごとに、首元の鈴が一度、チリン、と返事をしたのでした。